

センサーカメラが捉えた動物たち

センサーカメラを生物多様性センターからお借りし、2018年から2022年まで数か所で撮影した。

同定は中央博物館の下稲葉先生にお願いした。

写っていた哺乳類はタヌキ、アナグマ、ハクビシン、アライグマ、イタチ、ノウサギ、アカネズミであり、この場所にいそうな哺乳類がだいたい写っていた。

アナグマの巣穴が2か所あり、そこに1年以上カメラを固定して撮影した。アナグマ以外の哺乳類も多数出現していた。「同じ穴の貉ムジナ(アナグマのこと)」ということわざがあるが、実態として捉えることができた。タヌキ、アナグマ、ハクビシン、アライグマの出現頻度をデータ処理したが、季節によって出現頻度が異なるようであり、月別にアナグマの利用頻度が変化しているように見えます。子育ての関係で自分の巣穴にとどまる時間の長短が見られました。

「動物はそれぞれ複数のねぐらを持っていて、主人が留守の時は他の動物が使うことは良くある。穴を掘るのはアナグマだけなので、他の動物は居心地がいいので留守の時に使っている。穴の利用で集まってきていると思われる。自分より強い動物が近づいてくると察知し明け渡す。」(下稲葉)

二ホンノウサギは2020年までは捉えることができたがその後、カメラには映っていない。東邦大の学生が卒論研究で堂谷津の里を含む千葉市内のノウサギの生息状況を調査したが、1990年台に比べて確認箇所が減少して来ていることが明らかになりました。

植樹したコナラの苗のウサギ独特の食痕の食害も2020年までは確認されたがその後は確認されていない。糞もいつの間にか確認されなくなった。2020年を最後に堂谷津地域では消滅した可能性がある。



アナグマ



二ホンノウサギ



タヌキ



アライグマ



ハクビシン

野草園奥アナグマ巣穴前 2021.7～2022.6

